広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝楽府訳注（二十）：「出塞」三首
Author(s)	小川，恒男
Citation	中國中世文學研究，68：42 - 61
Issue Date	2016-09-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042532
Right	
Relation	

六朝楽府訳注（二十）―「出塞」三首―

小川恒男

はしがき

本稿では『楽府詩集』巻二十一・横吹曲辞一「出塞」の内、三首に訳注を作成した。隋の薛道衡の作二首、虞世基の作一首である。『楽府詩集』にはその指摘がないが、『古詩紀』では薛道衡、虞世基それぞれの作を「出塞二首」とした上で、題下注に「和楊素」の三字を加える。

『楽府詩集』は楊素の「出塞」を一首しか収載しない。楊素の作の次には薛道衡「同前二首」、虞世基「同前二首」が収められるが、これは『楽府詩集』のごく当たり前の体例である。『古詩紀』には楊素の「出塞」が『楽府詩集』所収の作とは別にもう一首採録されている。これで山名の詩人の作がそれぞれ二首ずつ、計六首。しかも六首のいずれもが二十句で構成されており、整然とした形式になっている。『古詩紀』が「和楊素」とするのも当然だろう。そこで、楊素・薛道衡・虞世基らの「出塞」計六首はまとめて訳注を作成した方がよかったのだが、相変わらずの怠惰に加えて例の如くの雑務に追われてしまい、残念ながら間に合わせることができなかった。残った虞世基「出塞」一首は次の訳注に回し、『楽府詩集』に収めない楊素の「出塞」も附録として訳注を作成することにしたい。

楊金梅『隋代詩歌研究』（社会科学文献出版社　二〇一一）「第九章　詩人専論之楊素：人格与詩格的悖反」に、

「出塞」二首是楊素僅有的両首辺塞詩。『隋書』本伝提到楊素曾経両次出塞、分別在文帝開皇十八年和仁寿初年。楊素分別以行軍総管以及行軍元帥的身份出塞抗撃突厥、均取得重大勝利。「出塞」二首即是根拠這両次出塞経歴而作。

「出塞」二首は楊素の数少ない二首の辺塞詩である。『隋書』本伝には楊素が二度辺塞に出征したことがあり、それぞれが文帝の開皇十八年と仁寿元年だったことに言及している。楊素はそれぞれ行軍総管及び行軍元帥の身分で辺塞に出征して突厥に反撃を加え、いずれも大勝利を勝ち得た。「出塞」二首はこの二回の辺塞出征の経験に基づいて作られた。

とある。開皇十八年は西暦五九八年。仁寿元年は六〇一年。楊素、薛道衡、虞世基の「出塞」六首の内容からしても、右の推測は首肯できそうである。彼らの「出塞」はいずれも突厥を匈奴になぞらえ、作中の将軍を霍去病や衛青になぞらえて表現しようとしており、背景に楊素の実体験があったのだろう。薛道衡、虞世基の作にはそれとなく楊素を称賛しようとする姿勢が見受けられる。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『楽府詩集』（中華書局　一九七九）である。

隋・薛道衡「出塞」二首其一

【本文及び書き下し】

1 高秋白露団　　高秋　白露　団として
2 上将出長安　　上将　長安を出づ
3 塵沙塞下暗　　塵沙　塞下に暗く
4 風月隴頭寒　　風月　隴頭に寒し
5 転蓬随馬足　　転蓬　馬足に随ひ
6 飛霜落剣端　　飛霜　剣端に落つ
7 凝雲迷代郡　　凝雲　代郡に迷ひ
8 流水凍桑乾　　流水　桑乾に凍る
9 烽微桔槔遠　　烽　微かにして　桔槔　遠く
10 橋峻轆轤難　　橋　峻くして　轆轤　難し
11 従軍多悪少　　従軍は多く悪少
12 召募尽材官　　召募は尽く材官
13 伏堤時臥鼓　　伏堤　時に鼓を臥せ
14 疑兵作解鞍　　疑兵　鞍を解くを作す
15 柳城擒冒頓　　柳城に冒頓を擒へ
16 長坂納呼韓　　長坂に呼韓を納る
17 受降今更築　　受降　今　更めて築き
18 燕然已重刊　　燕然　已に重ねて刊む
19 還嗤傅介子　　還って嗤ふ　傅介子の
20 辛苦刺楼蘭　　辛苦して楼蘭を刺せしを

【日本語訳】

1 白く透明な露がしとどに降りた天高き秋
2 上将軍は長安を出発された
3 辺塞の周辺は砂埃のために暗くなったし
4 隴頭では風や月の光が冷たかった
5 転がるヨモギは馬の足に着いていき
6 空中を漂う霜は剣先に降りた
7 厚い雲が代郡の辺りで行き先が分からなくなり
8 流れる水は桑乾で凍ってしまった
9 つるべを用いた烽火台が遠いので烽火は微かで
10 橋が高いので滑車で跳ね上げるのは難しかった
11 従軍の兵士は品行は悪いが屈強な若者が多く
12 呼び集めた兵士も皆強い弓を引くことができた
13 しかし今や、堤に伏せた兵たちは戦鼓を臥せ
14 囮の兵たちも馬の鞍を外した
15 柳城では冒頓単于を虜にし
16 長坂では呼韓邪単于の降伏を受け入れた
17 受降城をもう一度築き直し
18 燕然山ではまた新たに功績を石に刻んだ
19 彼の傅介子が苦労して苦労して
20 楼蘭王の首を取ったことを笑うのだ

【校勘】
○『文苑英華』巻百九十七・『古詩紀』巻百三十三・0『漢魏六朝百三家集』巻百十八
『詩紀』作「出塞二首」、題下注云「和楊素」。『百三家集』作「出塞二首和楊処道」。
13「堤」、『英華』作「波」、注云「一作『堤』」。
15「柳」、『英華』作「龍」、注云「一作『柳』」。

【押韻】
「団」「端」「官」、上平二十六桓韻。「安」「寒」「乾」「難」「鞍」「韓」「刊」「蘭」上平二十五寒韻。寒・桓同用。

【作者】
五四〇～六〇九。北朝、隋代を代表する詩人。字は玄卿、河東汾陰（山西省万栄県）の人。六歳の時、父を失うが、学問に精進し、十三歳の時に作った「国僑頌」が称賛された。初め北斉に仕え、北斉が滅びると北周・隋に仕えた。隋の文帝の開皇四（五八四）年、陳に使者として赴き、江南で「人日思帰」詩を作って陳の人々の絶賛を得た。隋の文帝は彼の才能を高く評価し、その名声は揺るぎなかったため、多くの文人たちが交友を求めたが、仁寿四（六〇四）年に文帝が亡くなると、新たに即位した煬帝には疎んじられ、大業五（六〇九）年には讒言のために処刑されてしまう。七十巻の集があったとされるが、今日に残る詩は僅かに二十一首。南朝風の華麗な詩風を得意とした。『隋書』巻五十七・『北史』巻三十六に伝がある。

【語釈】
1高秋白露団　2上将出長安
［高秋］空気が澄みわたって空が高く見える秋。漢・宋子侯「董嬌饒」詩（『玉台』巻一）に「高秋八九月、白露変為霜（高秋八九月、白露　変じて霜と為る）」。
［白露］秋の透き通って美しい露。『詩経』秦風・蒹葭に「蒹葭蒼蒼、白露為霜（蒹葭　蒼蒼たり、白露霜と為る）」。
［団］露が多い様。「溥（たん）」に通じる。また露の丸い様。『詩経』鄭風・野有蔓草に「野有蔓草、零露漙兮（野に蔓草有り、零露　漙たり）」とあり、「毛伝」は「漙漙然盛多也。（漙は漙然として盛多なり。）」という。また馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』に「『釈文』、『本又作団』。『文選』李善注引『毛詩』、『零露団兮』。与『釈文』所引一本合。（『釈文』に、『本と又た団に作る』と。『文選』李善注引『毛詩』に、『零露団たり』と。『釈文』の引く所の一本と合ふ。）」とある。
［上将］上将軍の略。将軍中のトップをいう。この語は次の虞世基「出塞」二首其二にも「上将三略遠、元戎九命尊（上将　三略　遠く、元戎　九命　尊し）」と見える。

3塵沙塞下暗　4風月隴頭寒
［塵沙］砂ぼこり。宋・謝霊運「擬魏太子鄴中集詩八首」（『文選』巻三十）其七・阮瑀に「河洲多沙塵、風悲黄雲起（河洲　沙塵多く、風　悲しくして　黄雲起こる）」とあり、漢・蔡邕の作とされる「胡笳十八拍」其二に「雲山万里兮帰路遐（はる）、疾風千里兮揚塵沙（雲山　万里　帰路　遐かに、疾風　千里　塵沙を揚ぐ）」と見える。
［塞下］辺塞の周辺。『史記』高祖本紀に「盧綰与数千騎居塞下候伺、幸上病癒自入謝。（盧綰　数千騎と塞下に居りて候伺し、上の病ひ　癒ゆれば自ら入りて謝せんことを幸ふ（ねが）。）」と。
［風月］清々しい風と明るい月。美しい風景をいう。陳後主叔宝「有所思」三首其二に「梁・庾肩吾「賦得嵇叔夜」詩に「山川千里間、風月両辺時（山川千里の間、風月　両辺の時）」。嬌玉
［隴頭］陝西省と甘粛省との間にある山の名。隴坻、隴山とも。唐・杜佑『通典』巻一百七十四に「天水郡……有大坂、名曰隴坻、亦曰隴山。（天水郡……大坂有り、名づけて隴坻と曰ひ、亦た隴山と曰ふ。）」。また、『太平御覧』巻五十六に引く「三秦記」に「其坂九廻、不知高幾里。欲上者七日乃越。高処可容百余家、下処数十万戸。上有清水四注。俗歌曰、『隴頭流水、鳴声幽咽。遥望秦川、心肝断絶』。去長安千里、望秦川如帯。又関中人上隴者、還望故郷悲思、而歌則有絶死者。（其の坂　九廻し、高きこと幾里なるかを知らず。上らんと欲する者　七日にして乃ち越ゆ。高き処は百余家を容るべく、下き処は数十万戸。上に清水の四もに注ぐ有り。俗歌に曰く、『隴頭流水、鳴声　幽咽す。遥かに秦川を望めば、心肝　断絶す』と。長安を去ること千里、秦川を望めば帯の如し。又た関中の人　隴に上れば、故郷を還望して悲思し、而も歌へば則ち絶死する者有り。）」。

5転蓬随馬足　6飛霜落剣端
［転蓬］秋になり風に吹かれて転がるヨモギ草。魏・曹植「雑詩」七首其二（『文選』巻二十九）に「転蓬離本根、飄颻（へうえう）随長風（転蓬　本根を離れ、飄颻として長風に随ふ）」。
［馬足］走る馬の足下。漢・張衡「東京賦」（『文選』巻三）に「馬足未極、輿徒不労。（馬足　未だ極まらず、輿徒　労せず。）」とある。また、梁・費昶「春郊見美人」詩（『玉台』巻六）に「陽陽蓋頂日、飄飄馬足塵（陽陽たり　蓋頂の日、飄飄たり　馬足の塵）。（「陽陽」、原作「湯湯」、今拠『類聚』巻十八而改。）」
［飛霜］天から降る霜。晋・張協「七命」八首（『文選』巻三十五）其二に「飛霜迎節、高風送秋。（飛霜　節を迎へ、高風　秋を送る。）」。

［剣端］剣の切っ先。梁・呉均「行路難」五首其二に「自言家在趙邯鄲、翩翩舌杪復剣端（自ら言ふ　家は趙の邯鄲に在り、翩翩たる舌杪も復た剣端なりと）」。

7 凝雲迷代郡　8 流水凍桑乾

［凝雲］濃い雲。斉・朱孝廉「白雪曲」に「凝雲没霄漢、従風飛且散（凝雲　霄漢に没し、風に従ひ　飛び且つ散ず）」。

［代郡］秦置く。河北省蔚県。北周・庾信「擬詠懐詩」二十七首其二十に「代郡蓬初転、遼陽桑欲乾（代郡に　蓬　初めて転じ、遼陽に　桑　乾かんと欲す）」と見える。また、梁・江淹「従蕭驃騎新亭」詩に「燕兵歌越水、代馬思呉州（燕兵　越水に歌ひ、代馬　呉州に思ふ）」。

［桑乾］川の名。桑乾河。山西省北部と河北省西北部を流れる。北斉・祖珽「従北征詩」に「翠旗臨塞道、霊鼓出桑乾（翠旗　塞道に臨み、霊鼓　桑乾より出づ）」。

9 烽微桔槔遠　10 橋峻轆轤難

［桔槔］ここは烽火台をいう。『史記』魏公子列伝に「公子与魏王博、而北境伝挙烽。（公子　魏王と博して、北境　烽を伝へ挙ぐ。）」とあり、裴駰『集解』は文穎の説を引き、「作高木櫓、櫓上作桔槔。桔槔頭兜零、以薪置其中、謂之烽。常低之、有寇即火然挙之以相告。（高木の櫓を作り、櫓上に桔槔を作る。桔槔の頭は兜零にして、薪を以て其の中に置き、之れを烽と謂ふ。常には之れを低くし、寇有れば即ち火然して之れを挙げて以て相ひ告ぐ。）」という。「兜零」は籠のこと。「桔槔」は井戸水を汲み上げる装置、はねつるべ。梁・劉孝威「雀乳空井中」詩に「轆轤糸綆絶、桔槔冬蘚周（轆轤　糸綆絶え、桔槔　冬蘚　周し）」。「

［轆轤］ここは滑車を使って橋を巻き上げる装置。『魏書』崔延伯伝に「横水為橋、両頭施大轆轤、出没任情、不可焼斫。（水に横たへて橋と為し、両頭に大轆轤を施して、出没　情に任せ、焼斫すべからざらしむ。）」と見える。「轆轤」も本来は井戸水を汲み上げるのに用いた。

11 従軍多悪少　12 召募尽材官

［悪少］品行があまりよろしくない若者。『漢書』昭帝紀に「発三輔及郡国悪少年吏有告劾亡者、屯遼東。（三輔及び郡国の悪少年の吏に告劾せられ亡ぐる有る者を発して、遼東に屯せしむ。）」とあり、顔師古注に「悪少年謂無頼子弟也。（悪少年　謂無頼の子弟を謂ふなり。）」と。梁・蕭子顯「従軍行」に「左角明王侵漢辺、軽薄良家悪少年（左角　明王漢辺を侵し、軽薄たり　良家の悪少年）」。

［召募］招募に同じ。呼び集める。『三国志』呉志・孫策伝に「因縁召募得数百人。（縁に因りて召募し

数百人を得る。）」と。また、梁・費昶「発白馬」詩に「家本楼煩俗、召募羽林児（家　本と楼煩の俗、羽林児に召募せらる）」。

［材官］強い弓を引く力の強い兵卒。『史記』張丞相列伝に「申屠丞相嘉者、梁人、以材官蹶張従高帝擊項籍、遷為隊率。（申屠丞相嘉は、梁人、材官蹶張を以て高帝に従ひて項籍を撃ち、遷りて隊率と為る。）」とあり、『集解』は如淳の説を引き「材官之多力、能脚蹋強弩張之、故曰蹶張。（材官の多力、能く脚もて強弩を蹋んで之れを張る、故に蹶張と曰ふ。）」という。また、梁簡文帝蕭綱「度関山」に「材官蹶張皆命中、弘農越騎尽搴旗（材官蹶張　皆な命中し、弘農越騎　尽く旗を搴る）」と。

13 伏堤時臥鼓　14 疑兵作解鞍

［伏堤］六朝詩では他の用例は見当たらない。詩意から堤防に埋伏された兵士をいうのだろう。

［臥鼓］太鼓を打ち鳴らすのを止める。戦闘が終わったことを表す。『後漢書』隗囂伝に「然後還師振旅、櫜弓臥鼓、申命百姓、各安其所。（然る後に師を還して振旅し、弓を櫜にし鼓を臥せ、申ねて百姓に命じて、各おの其の所に安んぜしむ。）」と。

［疑兵］大軍に見せかけた偽りの兵。『史記』淮陰侯列伝に「信乃益為疑兵、陳船欲渡臨晋、而伏兵従夏陽以木罌缶渡軍、襲安邑。（信　乃ち益ます疑兵を為し、船を陳ねて臨晋に渡らんと欲して、兵を伏せ夏陽より木罌缶を以て軍を渡し、安邑を襲ふ。）」。

［解鞍］馬の鞍を下ろす。ここは「臥鼓」と同じく戦闘を止めるの意で用いるだろう。『史記』李将軍列伝に「広令諸騎曰、『前』。前未到匈奴陳二里所、止、令曰、『皆下馬解鞍』。（広　諸騎に令して曰く、『前め』と。前みて未だ匈奴の陳に到らざること二里所、止まり、令して曰く、『皆な馬より下りて鞍を解け』と。）」とあり、宋・顔延之「秋胡詩」（『文選』巻二十一・『玉台』巻四）其三に「厳駕越風寒、解鞍犯霜露（厳駕　風寒を越え、鞍を解きて霜露を犯す）」。

15 柳城擒冒頓　16 長坂納呼韓

［柳城］遼寧省朝陽市。曹操が烏桓を破った地。『三国志』魏志・武帝紀に「引軍出盧龍塞、塞外道絶不通、乃塹山堙谷五百余里、経白檀、歴平岡、渉鮮卑庭、東指柳城。（軍を引ゐて盧龍の塞を出づるに、塞外　道　絶えて通ぜず、乃ち山を塹り谷を堙むること五百余里、白檀を経、平岡を歴て、鮮卑の庭を渉り、東のかた柳城を指す。）」と見える。『晋書』楽志下に「及魏受命、改其十二曲、…。改『巫山高』為『屠柳城』、言曹公越北塞、歴白檀、破三郡烏桓於柳城也。（魏の命を受くるに及び、其の十二曲を改む、…。『巫山高』を改めて『屠柳城』と為すは、言曹公の北塞を越え、白檀を歴、三郡の烏桓を柳城に破るを言ふなり。）」とある。

［冒頓］匈奴の王。？～前一七四。父の頭曼を殺して自ら単于の位に即き、強大な国家を建設した。『史記』匈奴列伝に詳しい。
［長坂］北地郡（甘粛省東部から陝西省北西部）赤須にあった坂。後漢・班彪「北征賦」（『文選』巻九）に「登赤須之長坂、入義渠之旧城。（赤須の長坂に登り、義渠の旧城に入る。）」とあり、李善注に「赤須坂、在北地郡。」と。
［呼韓］呼韓邪単于。在位前五八～前三一。兄の郅支単于と匈奴を東西に二分して対立すると、漢に援助を求め、長安を訪れ宣帝に謁した。郅支が漢に滅ぼされると、王昭君を妻に迎え漢との友好関係を維持した。

17受降今更築　18燕然已重刊

［受降］受降城。要塞の名。敵の降伏を受け入れるために築かれた。故城は内モンゴル烏拉特旗の北。『史記』匈奴列伝に「漢使貳師将軍広利西伐大宛、而令因杅将軍敖築受降城。（漢　貳師将軍広利をして西のかた大宛を伐たしめて、因杅将軍敖をして受降城を築かしむ。）」と見える。六朝詩では陳・江総「関山月」に「流落今如此、長戍受降城（流落して今　此くの如く、長く受降城に戍る）」。
［燕然］山名。後漢の竇憲が北単于を大いに破った際、燕然山に登りその功績を称える文章「封燕然山銘」（『文選』巻五十六）を班固に作らせて石に刻んだ。『後漢書』竇憲伝に「（竇憲）与北単于戦於稽落山、大破之、虜衆崩潰、単于遁走、追撃諸部、遂臨私渠比鞮海。……。憲秉随登燕然山。去塞三千余里、刻石勒功、紀漢威徳、令班固作銘。（北単于と稽落山に戦ひ、大いに之れを破り、虜衆　崩潰し、単于遁走し、諸部を追撃して、遂に私渠比鞮海に臨む。……。憲　秉　燕然山に登る。去塞を去ること三千余里、石に刻して功を勒み、漢の威徳を紀し、班固をして銘を作らしむ。）」と見える。
［重刊］新たに石に刻む。「刊」は刻む。後漢・班固「封燕然山銘」に「乃遂封山刊石、昭銘盛徳。（乃ち遂に山を封じ石に刊み、昭らかに盛徳を銘す。）」とあり、李善注に「刊石、削石、即謂立銘也。（刊石は、石を削る、即ち銘を立つるを謂ふなり。）」と。

19還嗤傅介子　20辛苦刺楼蘭

［還嗤］その上にあざ笑う。「嗤」は嘲笑する。「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其十五に「愚者愛惜費、但為後世嗤（愚者は費へを愛惜し、但だ後世の嗤ひと為る）」。
［傅介子］？～前六五。北地郡義渠の人。『漢書』傅介子伝に見える。傅介子は大将軍だった霍光に「楼蘭や亀茲は反乱を繰り返しながら処罰されることがなかったため、懲りることがありません。私が亀茲に行った時、王は人を近付けていましたので、刺し殺して漢の威を示してはどうでしょう。」と進言したところ、霍光は「亀茲は遠いので、まず楼蘭で試してみよ。」と答えた。傅介子は財宝を携え楼蘭に赴いたが、王が傅介子を近付けなかった。そこで、「介子陽引去、至其西界、使訳謂曰、『漢使者持黄金錦繡行賜諸国、王不来受、我去之西国矣。』即出金幣以示訳。訳還報王、王貪漢物、来見使者。介子与坐飲，陳物示之。飲酒皆酔、介子謂王曰、『天子使我私報王。』王起随介子入帳中、屏語。壮士二人従後刺之、刃交胸、立死。（［傅］介子　陽りて引き去り、其の西界に至り、訳をして謂はしめて曰く、『漢の使者　黄金錦繡を持して行きて諸国に賜ふも、王　来たりて受けず、我　去りて西国に之かん』と。即ち金幣を出だして以て訳に示す。訳　還りて王に報じ、王　漢の物を貪り、来たりて使者に見ゆ。介子　与に坐して飲み、物を陳ねて之れに示す。酒を飲んで皆な酔ひ、介子　王に謂ひて曰く、『天子　我をして私かに王に報ぜしむ』と。王　起ちて介子に随ひて帳中に入り、屏語す。壮士二人　後よりに之れを刺し、刃　胸に交はりて、立ちどころに死す。）」王の首を持って長安に帰還した傅介子はその功により義陽侯に封じられた。
［楼蘭］漢魏の頃、天山南路（新疆ウイグル自治区ロプノール湖の周辺）にあった国の名。詩語としての「楼蘭」については本誌第五二号に「六朝詩に見える『楼蘭』―楽府『白馬篇』を中心に―」で検討したことがある。

隋・薛道衡「出塞」二首其二

【本文及び書き下し】

1 辺庭烽火驚　辺庭　烽火　驚き
2 挿羽夜徴兵　挿羽　夜　兵を徴す
3 少昊騰金気　少昊　金気騰り
4 文昌動将星　文昌　将星動く
5 長駆鞮汗北　長駆す　鞮汗の北
6 直指夫人城　直ちに指す　夫人の城
7 絶漠三秋暮　漠を絶る　三秋の暮れ
8 窮陰万里生　窮陰　万里に生ず
9 寒夜哀笳曲　寒夜　哀笳の曲
10 霜天断雁声　霜天　断雁の声
11 連旗下鹿塞　旗を連ねて鹿塞に下り
12 畳鼓向龍庭　鼓を畳ねて龍庭に向かふ
13 妖雲墜虜陣　妖雲　虜陣に墜ち
14 暈月遶胡営　暈月　胡営を遶る
15 左賢皆頓顙　左賢　皆な頓顙し
16 単于已繫纓　単于　已に繫纓す
17 絏馬登玄関　馬を絏ぎて　玄関に登り
18 鉤鯤臨北溟　鯤を鉤けて　北溟に臨む
19 当知霍驃騎　当に知るべし　霍驃騎の
20 高第起西京　高第　西京に起てしを

【日本語訳】

1 辺境から烽火による急の知らせが届き
2 早馬に応じて夜の間に兵を徴発することになった
3 少昊が司る西方では秋の気配が立ち上り
4 文昌の星々の間で将軍の星が動き始めた
5 遠く鞮汗山の北にまで駆け付け
6 そのまま真っ直ぐに范夫人城を目指した
7 晩秋の夕暮れに砂漠を渡る頃
8 都を万里も離れた地でも年が尽きようとした
9 寒い夜には哀愁を帯びた胡笳の曲が聞こえ
10 秋の空から群れからはぐれた雁の声が聞こえた
11 軍旗を連ねて辺境に赴き
12 戦鼓を連打して匈奴の聖地に向かった
13 不吉な雲が敵の陣営に墜ち
14 暈のかかった月の光が敵の陣営を囲んだ
15 匈奴の貴族たちは皆降伏してぬかずき
16 匈奴の王ももはや捕縛されてしまった
17 北の果ての地に馬を繋いで休ませ
18 最北の海で伝説の大魚を釣り上げた
19 今の世の霍去病驃騎将軍は
20 匈奴を滅ぼしたのだから、長安に立派なお屋敷を構えるだろう

【校勘】
○『文苑英華』巻百九十七・『古詩紀』巻百三十三・『漢魏六朝百三家集』巻百十八
1 「驚」、『英華』作「警」。
9 「笳」、『詩紀』作「笛」。
11 「連旗下鹿塞」、『英華』作「旌旗連下鹿」。注云「一作『連旗下鹿塞』」。
17 「玄関」、『英華』『詩紀』並作「玄闕」。

【押韻】
「驚」「兵」「生」「京」、下平十二庚韻。「星」「庭」「溟」、下平十五青韻。「城」「声」「営」「纓」、下平十四清韻。庚・清同用。青、独用。

【語釈】
1 辺庭烽火驚　2 挿羽夜徴兵
［辺庭］辺境の異国の朝廷、転じて辺境地帯。梁・王訓「度関山」に「辺庭多警急、羽檄未曾閑（辺庭警急多く、羽檄　未だ曾て閑ならず）」とあり、呉均「入関」に「羽檄起辺庭、烽火乱如蛍（羽檄　辺庭より起こり、烽火　乱るること蛍の如し）」。
［烽火］のろし。宋・鮑照「出自薊北門行」（『文選』巻二十八）に「羽檄起辺亭、烽火入咸陽（羽檄　辺亭に起こり、烽火　咸陽に入る）」とあり、李善注は『史記』周本紀に「有寇至則挙烽火。（寇の至る有れば則ち烽火を挙ぐ。）」とあるのを引く。
［驚］急速に発動する。向島成美氏『漢詩のことば』（大修館書店　一九九八）「漢魏六朝詩の『驚』について」を参照のこと。
［挿羽］羽檄をいう。緊急を告げ派兵を求める文面を木の札に書き、至急の意を表すために鳥の羽を挟んだ。『史記』陳豨伝に「上曰、『非若所知。陳豨反、邯鄲以北皆豨有、吾以羽檄徴天下兵』。（上　曰く、『若の知る所に非ず。陳豨　反き、邯鄲以北は皆な豨の有、吾れ　羽檄を以て天下の兵を徴せん』と。）」とあり、『集解』に「『魏武帝奏事』曰、『今辺有小警、輒露檄挿羽、飛羽檄之意也』。駰案、推其言、則以鳥羽挿檄書、謂之羽檄、取其急速若飛鳥也。（『魏武帝奏事』に曰く、『今　辺に小警有れば、輒ち露檄に羽を挿すは、羽檄を飛ばさんとするの意なり』と。駰　案ずるに、其の言より推せば、則ち鳥の羽を以て檄書に挿す、之れを羽檄と謂ひ、其の急速なること飛鳥の若きに取るなり。）」とある。

3 少昊騰金気　4 文昌動将星
［少昊］太古の伝説上の皇帝。死後、西方を司る神とされた。ここは西方の意で用いる。五行説では金に方位は西が、季節は秋が配当される。『春秋左氏伝』昭公十七年に「郯子曰、『我高祖少皞摯之立也、鳳鳥適至。故紀於鳥、為鳥師而鳥名』。（郯子　曰く、『我が高祖　少皞　摯の立つや、鳳鳥　適に至る。故に鳥に紀し、鳥師と為して鳥もて名づく』と。）」とあり、杜預注に「少皞、金天氏、黄帝之子、己姓之祖也。（少皞、金天氏、黄帝の子、己姓の祖なり。）」と。また『呂氏春秋』孟秋に「孟秋之月、日在翼、昏斗中、旦畢中、其日庚辛、其帝少皞。（孟秋の月、日　翼に在り、昏に斗　中し、旦に畢　中し、其の日は庚辛、其の帝は少皞。）」とあり、高誘注に「少皞、帝嚳之子摯兄也。以金徳王天下、号為金天氏、死配金、為西方金徳之帝。（少皞、帝嚳の子　摯の兄なり。金徳を以て天下に王たり、号して金天氏と為し、死して金に配され、西方金徳の帝と為る。）」と。
［金気］五行説で金の気質。また、金が秋に配当されることから秋の気配。梁・簡文帝「倡婦怨情詩十二韻」（『玉台』巻七）に「玉関駆夜雪、金気落厳霜（玉関　夜雪に駆り、金気　厳霜落つ）」と。
［文昌］星座の名。六つの星から成り、北斗七星の近くにあり、半月の形に並ぶ。『史記』天官書に「斗魁戴匡六星曰文昌宮。一曰上将、二曰次将、三曰貴相、四曰司命、五曰司中、六曰司禄。（斗魁戴匡の六星を文昌宮と曰ふ。一に曰く上将、二に曰く次将、三に曰く貴相、四に曰く司命、五に曰く司中、六に曰く司禄。）」
［将星］将軍を象徴する星。『晋書』天文志下に「（元帝太興）三年五月戊子、太白入太微、又犯上将星。（三年五月戊子、太白　太微に入り、又た上将星を犯す。）」と見える。

5 長駆鞮汗北　6 直指夫人城
［長駆］遠くから駆け付ける。魏・曹植「名都篇」（『文選』巻二十七）に「攬弓捷鳴鏑、長駆上南山（弓を攬

りて鳴鏑を　捷（さしはさ）み、長駆して南山に上る）」と。
［鞮汗］山名。今のモンゴル国の南部。『漢書』李陵伝に「漢軍南行、未至鞮汗山、一日五十万矢皆尽、即棄車去。（漢軍　南行し、未だ鞮汗山に至らず、一日にして五十万の矢　皆な尽き、即ち車を棄てて去る。）」
［直指］真っ直ぐに赴く。『後漢書』朱儁伝に「故相率厲、簡選精悍、堪能深入、直指咸陽。（故に相ひ率（ひき）ゐ厲（はげ）まし、精悍にして、能く深く入るに堪へたるを簡選し、直ちに咸陽を指す。）」とある。
［夫人城］范夫人城のこと。今のモンゴル国内にあった。『漢書』匈奴伝上に「漢軍乗勝追北、至范夫人城。（漢軍　勝ちに乗じて北（に）ぐるを追ひ、范夫人城に至る。）」とあり、顔師古注は応劭を引き「本漢将築此城。将亡、其妻率余衆完保之、因以為名也。（本と漢の将　此の城を築く。将（し）亡し、其の妻余衆を率ゐて之れを完保し、因りて以て名と為すなり。）」とある。

7 絶漠三秋暮　8 窮陰万里生

［絶漠］砂漠を横切る。『後漢書』西域伝序に「浮河絶漠、窮破虜庭。（河に浮かび漠を絶（わた）り、虜庭を窮破す。）」とあり、李賢注に「沙土曰漠、直度曰絶也。（沙土を漠と曰ひ、直ちに度（わた）るを絶と曰ふなり。）」という。また、宋・顔延之「従軍行」に「横海咸飛驪、絶漠皆控弦（海を横ぎるは咸な飛驪、漠を絶るは皆な控弦（こうげん））」。
［三秋］秋。七月を孟秋、八月を仲秋、九月を季秋といい、合わせて三秋という。宋・謝恵連（『楽府詩集』巻三十二、作謝霊運）「燕歌行」に「四時推遷迅（はや）不停。三秋蕭瑟葉辞茎（四時　推遷し　迅くして停（とど）まらず、三秋　蕭瑟として　葉　茎を辞す）」。
［窮陰］冬が終わり年が尽きる時。宋・鮑照「舞鶴賦」（『文選』巻十四）に「於是窮陰殺節、急景凋年。（是に於いて窮陰殺節（きゅういんさつせつ）、急景凋年（きけいてうねん）。）」とあり、李善注は「『礼記』曰、『季冬之月、日窮於次』。『神農本草経』曰、『秋冬為陰』。（『礼記』に曰く、『季冬の月、日　次（じ）に窮（きは）まる』と。『神農本草経』に曰く、『秋冬を陰と為す』。）」とする。『礼記』は「月令」。『神農本草経』は佚文。
［万里生］万里にわたって発生する。梁・江淹「従冠軍建平王登廬山香爐峯」（『文選』巻二十二）に「日落長沙渚、曾陰万里生（日は長沙の渚に落ち、曾陰万里に生ず）」と。「曾陰」は重なり合って層になった雲。

9 寒夜哀笳曲　10 霜天断雁声

［寒夜］秋または冬の寒い夜。東晋・陶潜「怨詩楚調示龐主簿和鄧治中」に「夏日長抱飢、寒夜無被眠（夏日　長（つね）に飢ゑを抱き、寒夜　被無くして眠る）」と。
［哀笳］胡笳の哀切な響き。胡笳は葦の葉を巻いて作った笛。梁・庾肩吾「登城北望」詩に「霜戈曜壠日、哀笳断塞風（霜戈（さうくわ）　壠日（ろうじつ）に曜（かがや）き、哀笳　塞風に断たる）」とある。
［霜天］空気が澄みわたった秋の空。梁簡文帝「詠雲」詩に「浮雲舒五色、瑪瑙応霜天（浮雲　五色を舒（の）べ、瑪瑙（めのう）　霜天に応ず）」。
［断雁声］「断雁」は、群れから離れてしまった雁。六朝詩では他の用例は見当たらない。「雁声」は雁の鳴き声。梁・沈約「歳暮愍衰草」に「流蛍暗明燭、雁声断纔続（流蛍　明燭暗く、雁声　断えて纔（わ）かに続ぐ）」と。

11 連旗下鹿塞　12 畳鼓向龍庭

「連旗」旗や幟が連なること。しばしば軍の盛んな様を形容する。北周・王褒「奉和趙王途中五韻」詩（庾信の集にも収めるが、『古詩紀』巻百二十五は『芸文』云、『王褒作。庾集載此。疑誤収也』。（『芸文』云ふ、『王褒の作。庾集　此れを載す。疑ふらくは誤りて収めしならん』と。）」とする。）
［鹿塞］辺塞をいう。隋煬帝楊広「雲中受突厥主朝宴席賦詩」にも「鹿塞鴻旗駐、龍庭翠輦回（鹿塞に鴻旗　駐まり、龍庭に　翠輦　回る）」と見える。
［畳鼓］太鼓を急速に小刻みに叩く。斉・謝朓「鼓吹曲」（『文選』巻二十八）に「凝笳翼高蓋、畳鼓送華軿（笳を凝らして高蓋を翼（おく）り、鼓を畳（かさ）ねて華軿（くわへん）を送る）」とあり、李善注に「小撃鼓謂之畳。（小さく鼓を撃つ　之れを畳と謂ふ。）」とある。
［龍庭］匈奴の王である単于が鬼神を祭るところ。『後漢書』竇憲伝に「躡冒頓之区落、焚老上之龍庭。（冒頓の区落を躡（ふ）み、老上の龍庭を焚（や）く。）」とあり、李賢注に「匈奴五月大会龍庭、祭其先・天地・鬼神。（匈奴　五月　大いに龍庭に会し、其の先・天地・鬼神を祭る。）」とある。また、斉・謝朓「永明楽」十首其五に「化洽鯷海君、恩変龍庭長（化は鯷海（ていかい）の君を洽（うるほ）し、恩は龍庭の長を変ふ）」と。

13 妖雲墜虜陣　14 暈月遶胡営

［妖雲］邪悪な雲。六朝詩では他に用例が見当たらない。楊素「出塞」にも「長平翼大風、雲横虎落陣（長平　大風に翼（たす）けらる、雲は横たはる　虎落の陣）」と敵陣に不吉な雲が漂う様が描かれていた。
［虜陣］西北の遊牧民族が構えた陣地。宋・鮑照「出自薊北門行」（『文選』巻二十八）に「厳秋筋竿勁、虜陣精且強（厳秋　筋竿　勁（つよ）く、虜陣　精にして且つ強し）」とある。
［暈月］暈（かさ）がかかった月。『史記』天官書に「平城之囲、月暈参・畢七重。（平城の囲みに、月　参・畢に暈（うん）すること七重。）」といい、梁簡文帝「隴西行」三首其一に「月暈抱龍城、星流照馬邑（月暈　龍城を抱き、星流　馬邑を照らす）」とある。
［胡営］遊牧民族の陣営。「虜陣」とほぼ同じ意味だろう。六朝詩には他の用例は見当たらない。

15左賢皆頓顙　16単于已繋纓

［左賢］匈奴の貴族の称号。左賢王、右賢王があった。『史記』李将軍列伝に「匈奴左賢王将四万騎囲広。（匈奴の左賢王　四万騎を将ゐて広を囲む。）」と見え、梁・范雲「効古」詩（『文選』巻三十一）に「朝駆左賢陣、夜薄休屠営（朝には左賢の陣に駆け、夜には休屠の営に薄る）」とある。

［頓顙］跪いてひれ伏す。降伏の意志を表す。『国語』呉語に「句践用帥二三之老、親委重罪、頓顙於辺。（句践　用て二三の老を帥ゐ、親ら重罪に委ねて、辺に頓顙す。）」とある。六朝詩にはあまり用例はないが、隋煬帝「雲中受突厥主朝宴席賦詩」に「呼韓頓顙至、屠耆接踵来（呼韓　頓顙して至り、屠耆　踵を接して来たる）」と見える。

［繋纓］人を縄で縛る。「繋」は「羈」に通じ、人をつなぐこと。「纓」は人をつなぐ縄。『漢書』終軍伝に「軍自請、『願受長纓、必羈南越王而致之闕下』。（軍　自ら『願はくは長纓を受け、必ず南越王を羈ぎて之れを闕下かに致さんことを』と請ふ。）」と。

17絏馬登玄関　18鉤鯤臨北溟

［絏馬］馬に縄をつなぐ。「絏」は「紲」に通じる。『楚辞』離騒に「朝吾将済於白水兮、登閬風而紲馬（朝に吾　将に白水を済り、閬風に登りて馬を紲がんとす）」とあり、王逸注に「紲、繫也。…。紲、一作絏。」と。

［玄関］仏道に入る入口をいうが、ここは次句の「北溟」と対であるから、『文苑英華』が作る「玄闕」の意で用いると思う。「玄闕」は北の果ての地。『史記』司馬相如伝に「遺屯騎於玄闕兮、軼先駆於于寒門。（屯騎を玄闕に遣し、先駆を寒門に軼す。）」とあり、『集解』は『漢書音義』を引いて「玄闕、北極之山。」とする。

［鉤鯤］伝説の大魚、鯤を釣り上げる。『荘子』逍遥遊に「北冥有魚、其名為鯤。鯤之大、不知其幾千里也。（北冥に魚有り、其の名を鯤と為す。鯤の大いさ、其の幾千里なるかを知らざるなり。）」とある。「鉤」は鉤に引っ掛ける。

［北溟］「北冥」とも。北の果てにあるとされた大海。

19当知霍驃騎　20高第起西京

［霍驃騎］漢の英雄、霍去病。前一四〇～一一七。武帝の行った対匈奴戦で中心的な役割を果たした。「驃騎」は将軍の名。『史記』驃騎列伝に「元狩二年春、以冠軍侯去病為驃騎将軍。（元狩二年春、冠軍侯去病を以て驃騎将軍と為す。）」と見える

［高第］一般的には官吏として優秀であることを言うが、ここは『史記』驃騎列伝に「天子為治第、令驃騎視之、対曰、『匈奴未滅、無以家為也』。（天子為に第を治め、驃騎をして之れを視しむるに、対へて曰く、『匈奴　未だ滅びず、家を以て為す無きなり』と。）」とあるのを踏まえ、立派な邸宅のこと。

「第」はやしき。

［西京］東の洛陽に対して長安をいう。

隋・虞世基「出塞」二首其一

【本文及び書き下し】

1 窮秋塞草腓　窮秋　塞草　腓として
2 塞外胡塵飛　塞外　胡塵　飛ぶ
3 徴兵広武至　徴兵　広武に至り
4 候騎陰山帰　候騎　陰山に帰る
5 廟堂千里策　廟堂　千里の策
6 将軍百戦威　将軍　百戦の威
7 轅門臨玉帳　轅門に臨み　玉帳に臨み
8 大旆指金微　大旆　金微を指す
9 摧朽無勍敵　朽ちたるを摧くに　勍敵無く
10 応変有先機　変に応じて　先機有り
11 銜枚圧暁陣　枚を銜みて　暁陣を圧し
12 巻甲解朝囲　甲を巻きて　朝囲を解く
13 瀚海波瀾静　瀚海　波瀾　静かに
14 王庭氛霧晞　王庭　氛霧　晞く
15 鼓鼙厳朔気　鼓鼙　朔気厳しく
16 原野曀寒暉　原野　寒暉曀る
17 勳庸震辺服　勳庸　辺服を震はせ
18 歌吹入京畿　歌吹　京畿に入る
19 待拝長平坂　拝せらるるを待つ　長平の坂
20 鳴騶入礼闈　鳴騶　礼闈に入る

【日本語訳】

1 秋が終わろうとする頃、辺塞の草木はしおれ
2 国境の砦の外では匈奴の騎兵が起こす砂塵が風に舞った
3 徴発された兵士たちは広武に到着し
4 匈奴の斥候は陰山へと帰っていく。
5 朝廷には千里も離れたところから勝敗を決する策略があり
6 将軍には百戦をくぐり抜けてきた者の威厳が備わっている
7 遠征軍の陣営は建康の玉帳山に迫り
8 勢い盛んな軍の御旗は北の金微山を目指した
9 強い敵がいないので、腐った木を砕くようなもの
10 情勢の変化に機敏に応じて、先制のチャンスを握った
11 夜明け前、横木を口にくわえて敵陣を圧倒し
12 明け方、よろいを巻き上げて急行し敵の包囲を突破した
13 瀚海の砂漠では波乱が収まって静かに
14 単于の居処では霧が晴れた
15 北の冷たい気配がさし迫る頃、軍中の太鼓が鳴り渡り
16 何もなく広い平地では冬の冷たい太陽が光を奪われた
17 辺境の地を震撼させて立派な功績を挙げ
18 人々の喜びの声と共に都に凱旋した

19長平坂で天子のお声が掛かるのを待っていると
20お供の騎兵が尚書省へと駆け込んでいった

【校勘】
○『文苑英華』巻百九十七・『古詩紀』巻百三十四
8「微」、『英華』作「徽」。
9「勍」、『詩紀』作「勁」。
17「服」、『英華』作「塞」。
19「長平」、『英華』作「長安」。

【押韻】
「腓」「飛」「帰」「威」「微」「機」「囲」「晞」「暉」「畿」「闈」、上平八微韻。

【作者】
五五二？～六一八。陳及び隋の政治家。字は茂世。会稽余姚（浙江省余姚市）の人。父の茘は陳代の文人、弟は「初唐の三大家」の一人として著名な書家、虞世南。陳の宣帝の太建の初め頃、弟世南とともに顧野王に師事し、若くして博学、草隷を善くし、孔奐や徐陵の知る所となった。太建四年頃、陳の建安王の法曹参軍となり、太子中庶子、尚書左丞を歴任した。陳が滅びると、隋に仕えて通直郎となったが、家が貧しかったので、書物を書写して家族を養った。煬帝が即位すると内史侍郎に抜擢され、政権の中心を担った。大業八（六一二）年の高句麗遠征の際には金紫光禄大夫に昇進したが、この頃から煬帝の失政が続くようになり、煬帝が宇文化及に殺されると、世基も同じく殺された。

【語釈】
1 窮秋塞草腓　2 塞外胡塵飛
［窮秋］晩秋。秋が終わろうとする頃。宋・鮑照「代白紵曲」二首（『玉台』巻九作「代白紵舞歌辞」）其一に「窮秋九月荷葉黄、北風駆雁天雨霜（窮秋九月　荷葉　黄なり、北風　雁を駆り　天　霜を雨らす）」と。
［塞草腓］「塞草」は辺塞の地に生えた草。鮑照「蕪城賦」（『文選』巻十一）に「白楊早落、塞草前衰。（白楊　早く落ち、塞草　前に衰ふ。）」とあり、李善注は「李陵書曰、『涼秋九月、塞外草衰』。（李陵の書に曰く、『涼秋九月、塞外　草　衰ふ』。）」と「答蘇武書」（『文選』巻四十一）を引く。「腓」は草木がしおれること。梁・沈約「留真人東山還」詩に「寥戾野風急、芸黄秋草腓（寥戾として　野風　急に、芸黄として　秋草　腓たり）」（「腓」、『芸文類聚』巻七作「肥」。）とある。
［胡塵飛］「胡塵」は西北の遊牧民族が兵馬を動かして生ずる砂塵。斉・孔稚珪「白馬篇」に「虜騎四山合、胡塵千里驚（虜騎　四山に合し、胡塵　千里に驚く）」と。「飛」は砂塵が風に吹かれて盛んに立ち上る様を形容する。隋煬帝楊広「白馬篇」（『英華』巻二百九。『楽府詩集』巻六十三作孔稚珪「白馬篇」。）に「塵飛戦鼓急、風交征旆揚（塵　飛びて　戦鼓　急に、風　交じりて　征旆　揚がる）」とある。

3 徴兵広武至　4 候騎陰山帰
［徴兵］次句の「候騎」と対なので、ここは徴発された兵士の意。薛道衡「出塞」二首其二にも「辺庭烽火驚、挿羽夜徴兵（辺庭　烽火　驚き、挿羽　夜兵を徴す）」とあった。
［広武］漢代の県名。前漢には太原郡に属し、後漢には雁門郡に属した。山西省忻州市代県。『漢書』劉敬伝に「械繋敬広武。（敬を広武に械繋す。）」とあり、顔師古注は「広武、県名。属雁門。」とする。この地には雁門関があり、北方の遊牧民族の南下を防ぐ要衝の地だった。鮑照「出自薊北門行」（『文選』巻二十八）に「羽檄起辺亭、烽火入咸陽。徴騎屯広武、分兵救朔方（羽檄　辺亭に起こり、烽火　咸陽に入る。騎を徴して広武に屯め、兵を分かちて朔方を救ふ）」とあり、李善注は『漢書』地理志上を引いて「太原郡有広武県。」とする。
［候騎］偵察を任務とする騎兵。『史記』匈奴列伝に「漢孝文皇帝十四年、匈奴単于十四万騎入朝那・蕭関、殺北地都尉卬、虜人民畜産甚多、遂至彭陽。使奇兵入焼回中宮、候騎至雍甘泉。（漢の孝文皇帝十四年、匈奴の単于　十四万騎　朝那・蕭関に入り、北地都尉卬を殺し、人民畜産を虜にすること甚だ多く、遂に彭陽に至る。奇兵をして入りて回中宮を焼かしめ、候騎　雍の甘泉に至る。）」とあり、『索隠』は「崔浩云、『候、邏騎』。（崔浩　云ふ、『候、邏騎なり』。）」とする。詩では梁・何遜「見征人分別」詩に「候騎出蕭関、追兵赴馬邑（候騎　蕭関を出で、追兵　馬邑に赴く）」。
［陰山］内モンゴル自治区中央部、黄河の北側を走る山脈。北辺の防御ラインとして重要視されてきた。晋・陸機「飲馬長城窟行」（『文選』巻二十八）に「駆馬陟陰山、山高馬不前（馬を駆りて陰山に陟らんとするも、山　高くして　馬　前まず）」とあり、李善注は『漢書』匈奴伝下に「郎中侯応習辺事、以為不可許。上問状、応曰、『周・秦以来、匈奴暴桀、寇侵辺境、漢興、尤被其害。臣聞北辺塞至遼東、外有陰山』。（郎中侯応　辺事に習れ、以為へらく　許すべからずと。上　状を問ふに、応　曰く、『周・秦以来、匈奴　暴桀にして、辺境を寇侵し、漢　興るや、尤も其の害を被る。臣　北辺の塞　遼東に至り、外に有陰山有りと聞く』と。）」とあるのを引く。

5 廟堂千里策　6 将軍百戦威
［廟堂］朝廷。君主を中心とする中央政府。詩ではあまり使われない語だが、魏・曹植「嘉禾謳」に「献之廟堂、以昭厥霊（之れを廟堂に献じ、以て厥の霊を昭らかにす）」と見える。

[千里策]千里も離れた朝廷に居ながらにして勝敗を決する策略。『史記』高祖本紀に「高祖曰、『…。夫運籌策帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房』。（高祖　曰く、『…。夫れ籌策を帷帳の中に運らし、勝ちを千里の外に決するは、吾れ　子房に如かず』と。）」。

[百戦威]あまたの戦闘をくぐり抜けて来た威厳。梁・戴暠「度関山」に「将軍一百戦、都護五千兵」。

7 轅門臨玉帳　8 大旆指金微

[轅門]兵を率いる将軍の陣営の門。畳韻。『史記』項羽本紀に「於是已破秦軍、項羽召見諸侯将、入轅門、無不膝行而前、莫敢仰視。（是に於いて已に秦軍を破り、項羽　諸侯の将を召見するに、轅門を入るや、膝行して前まざる無く、敢へて仰ぎ視る莫し。）」と見える。

[玉帳]山名。梁の宮中にあった小さな山。転じて南朝の都である建康を指す。北周・庾信「玉帳山銘」（『類聚』巻七作庾肩吾）に「玉帳寥郭、崑山抵鵲。（玉帳　寥郭として、崑山　鵲に抵つ。）」と見える。ここは、楊素が陳を滅ぼすのに功績があったことをいう。

[大旆]立派な旗。勢いの盛んな兵を表す。畳韻。六朝詩では他の用例は見当たらない。『春秋左氏伝』僖公二十八年に「亡大旆之左旃。（大旆と左旃之を亡ふ。）」と見える。

[金微]山名。内モンゴル自治区。『後漢書』和帝紀に「（永元三年）二月、大将軍竇憲遣左校尉耿夔出居延塞、囲北単于於金微山、大破之、獲其母閼氏。（二月、大将軍竇憲　左校尉耿夔を遣はして居延塞より出で、北単于を金微山に囲ましめ、大いに之れを破り、其の母閼氏を獲ふ。）」と見える。ここは楊素の対突厥戦の功績をいう。

9 摧朽無勍敵　10 応変有先機

[摧朽]腐った木を砕く。容易にできることの比喩。語は『漢書』異姓諸侯王表序に「鐫金石者難為功、摧枯朽者易為力、其勢然也。（金石を鐫る者の功を為し難く、枯朽を摧く者の力を為し易きは、其の勢ひの然るなり。）」とあるのに拠る。

[勍敵]強大な敵。『春秋左氏伝』僖公二十二年に「勍敵之人、隘而不列、天贊我也。（勍敵の人、隘にして列せざるは、天の我を贊くるなり。）」とあり、杜預注に「勍、強也。」と。詩では宋・何承天「戦城南篇」に「勍敵猛、戎馬殷（勍敵　猛く、戎馬　殷んなり）」

[応変]変化に順応する。『史記』太史公自序に「非信廉仁勇不能伝兵論剣、与道同符、内可以治身、外可以応変。（信廉仁勇に非ざれば兵を伝へ剣を論ずる能はず、道と符を同じくし、内は以て身を治むべく、外は以て変に応ずべし。）」とある。

[先機]敵に先んずるチャンス。『南斉書』州郡志上

に「朝廷遺軍歴陽、已当不得先機。（朝廷　軍を歴陽に遣はすも、已に当に先機を得ざるべし。）」と見える。

11 銜枚圧暁陣　12 巻甲解朝囲

[銜枚]兵や馬が物音を立てないように口に枚をくわえる。「枚」は両端に首で結ぶための紐が付いた木片。『周礼』夏官・大司馬に「遂鼓行、徒銜枚而進。（遂に鼓行そ、徒　枚を銜みて進む。）」とあり、鄭注に「枚如箸銜之。有繣結項中。（枚　箸の如く之れを銜む。繣有りて項中に結ぶ。）」と。

[暁陣]夜明けを迎えた敵陣。語としては梁・劉孝儀「和昭明太子鍾山解講」詩に「夜気清簫管、暁陣爍郊原（夜気　簫管清く、暁陣　郊原を爍く）」と見えるが、これは朝焼けをいうのだろう。

[巻甲]速やかに移動するために、よろいを巻き上げる。『孫子』軍争篇に「是故巻甲而趨、日夜不処、倍道兼行、百里而争利、則擒三将軍。（是の故に甲を巻きて趨り、日夜　不らず、道を倍して兼行し、百里にして利を争へば、則ち三将軍を擒にす。）」とある。詩では宋・顔延之「従軍行」に「接鏑赴陣首、巻甲起行前（鏑に接して陣首に赴き、甲を巻きて行前に起つ）」と。

[解朝囲]朝には敵の包囲を取り除く。「解囲」、『戦国策』斉策に「故解斉国之囲、救百姓之死、仲連之説也。（故に斉国の囲みを解き、百姓の死を救ひしは、仲連の説なり。）」と見える。また、『史記』陳丞相世家に「卒至平城、為匈奴所囲、七日不得食。高帝用陳平奇計、使単于閼氏、囲以得開。高帝既出、其計秘、世莫得聞。（卒に平城に至り、匈奴の囲む所と為り、七日　食を得ず。高帝　陳平の奇計を用ひ、単于の閼氏に使ひし、囲み以て開くを得たり。高帝　既に出で、其の計は秘し、世　聞くを得る莫し。）」とある。

13 瀚海波瀾静　14 王庭氛霧晞

[瀚海]瀚海は翰海、澣海とも表記され、中国西北部に広がる砂漠を指す。前稿に掲載した楊素「出塞」にも「冠軍臨瀚海、長平翼大風（冠軍　瀚海に臨み、長平　大風に翼けらる）」とあった。

[波瀾]なみ。晋・陸機「君子行」（『文選』巻二十八）に「休咎相乗躡、翻覆若波瀾（休咎　相ひ乗り躡み、翻覆　波瀾の若し）」と。

[王庭]西北遊牧民族の長がいるところ。司馬遷「報任少卿書」（『文選』巻四十一）に「（李陵）深践戎馬之地、足歴王庭。（深く戎馬の地を践み、足は王庭を歴たり。）」とあり、李善注に「単于所居之処、号曰王庭。（単于の居る所の処、号して王庭と曰ふ。）」と。

[氛霧]霧をいうが、世の混乱や戦乱の比喩として用いられる。漢・劉向「九嘆」惜賢に「俟時風之清激兮、愈氛霧其如塵（時風の清激をてば兮、愈いよ氛

霧して其れ塵の如し)」と見える。

15 鼓鼙厳朔気　16 原野曀寒暉

[鼓鼙] 鼓鞞とも。「鼙」は小太鼓。軍中でも用いられた。転じて戦争を表す。晋・張協「雑詩」(『文選』巻二十九) 十首其七に「出覩軍馬陣，入聞鞞鼓声 (出でては軍馬の陣を覩、入りては鞞鼓の声を聞く)」とあり、李善注は『礼記』楽記に「君子聴鼓鼙之声、則思将帥之臣。(君子　鼓鼙の声を聴けば、則ち将帥の臣を思ふ。)」とあるのを引く。

[朔気] 北方の冷たい気配。梁・蕭子範「夜聴鴈」詩に「連翩辞朔気、嘹唳独南帰 (連翩　朔気を辞し、嘹唳　独り南帰す)」と。

[原野] 草が生え、広々として何もない平地。魏・曹植「贈白馬王彪」詩七章 (『文選』巻二十四) 其四に「原野何蕭条、白日忽西匿 (原野　何ぞ蕭条たる、白日　忽ち西に匿る)」と。

[曀] 空が暗くなり風が吹く。『詩経』邶風・終風に「終風且曀、不日有曀 (終風　且つ曀り、日ならずして有た曀る)」とあり、「毛伝」に「陰而風曰曀。(陰りて風あるを曀と曰ふ。)」と。

[寒暉] 冬の弱々しい日の光。梁・蕭洽「侍釈奠会」詩五章其五に「冬物澄華、寒暉暠絜 (冬物　澄華として、寒暉　暠絜たり)」

17 勲庸震辺服　18 歌吹入京畿

[勲庸] 功績。手柄。晋・潘岳「馬汧督誄」(『文選』巻五十七) に「孰是勲庸、而不獲免。(孰れか是れ勲庸にして、免るるを獲ざる。)」と。

[震] 武力でおびやかす。『詩経』周頌・時邁に「薄言震之、莫不震疊 (薄か言に之れを震かし、震疊せざる莫し)」とあり、「毛伝」に「震、動也。」、「鄭箋」に「甫動之以威、則莫不動懼而服者。(甫め之れを動かすに威を以てすれば、則ち動懼して服せざる者莫し。)」と。

[辺服] 天子の直轄地から遠く離れた辺境の地。北周・庾信「奉和永豊殿下言志」詩十首其二に「王子従辺服、臨邛惜第如 (王子　辺服に従ひ、臨邛　第如を惜しむ)」とある。

[歌吹] 歌声と楽器の音。人々が平和を喜ぶ様をいう。晋・孫楚「為石仲容与孫皓書」(『文選』巻四十三) に「遊龍曜路、歌吹盈耳 (遊龍　路を曜らし、歌吹　耳に盈つ)」とあり、李善注に「『楽稽耀嘉』曰、『武王興師誅于商、万国咸喜、前歌後舞』。(『楽稽耀嘉』に曰く、『武王　師を興して商を誅するや、万国　咸な喜び、前に歌ひ後に舞ふ』と。)」とある。

[京畿] 都とその周辺の地。魏・曹植「責躬詩」(『文選』巻二十) に「天啓其衷、得会京畿 (天　其の衷を啓き、京畿に会するを得たり)」。

19 待拝長平坂　20 鳴騶入礼闈

[待拝] 官位を授けられるのを待つ。六朝詩では他の用例は見当たらない。

[長平坂] 坂の名。陝西省咸陽市涇陽県。漢の宣帝の甘露三年、匈奴の呼韓邪単于が来朝した際、長平坂で応接した。『漢書』宣帝紀に「上自甘泉宿池陽宮。上登長平阪、詔単于毋謁。其左右当戸之群皆列観、蛮夷君・長・王・侯迎者数万人、夾道陳。(上　甘泉より池陽宮に宿る。上　長平阪に登り、単于に詔して謁する毋からしむ。其の左右当戸の群　皆な列観し、蛮夷の君・長・王・侯の迎ふる者　数万人、道を夾みて陳ぶ。)」とある。

[鳴騶] 貴顕が外出する時、お供をする騎兵。斉・孔稚珪「北山移文」(『文選』巻四十三) に「及其鳴騶入谷、鶴書赴隴、形馳魄散、志変神動。(其の鳴騶　谷に入り、鶴書　隴に赴くに及び、形は馳せ魄は散じ、志は変はり神は動く。)」と見える。

[礼闈] 尚書省をいう。漢代の尚書省が建礼門内にあり、禁闈 (宮廷の門) に近かったことから。梁・任昉「王文憲集序」(『文選』巻四十六) に「出入礼闈、朝夕旧館。(礼闈に出入し、旧館に朝夕す。)」とあり、李善注は「十州記」に「崇礼闈、即尚書上省門。崇礼東建礼門、即尚書下舎門。(崇礼闈は、即ち尚書の上省の門。崇礼の東の建礼門は、即ち尚書の下舎の門。)」とあるのを引き、「然尚書省二門名礼。故曰礼闈也。(然らば尚書省の二門　名礼と名づく。故に礼闈と曰ふなり。)」とする。六朝詩には他の用例は見当たらない。『隋書』本伝によると、楊素は開皇十二 (五九二) 年に尚書右僕射、仁寿元 (六〇一) 年に尚書左僕射になっている。

※本稿は平成二十八年度科学研究費基盤研究 (C)「言語実験の場としての六朝楽府に関する研究」(課題番号二六三七〇四一〇) の助成を受けたものである。